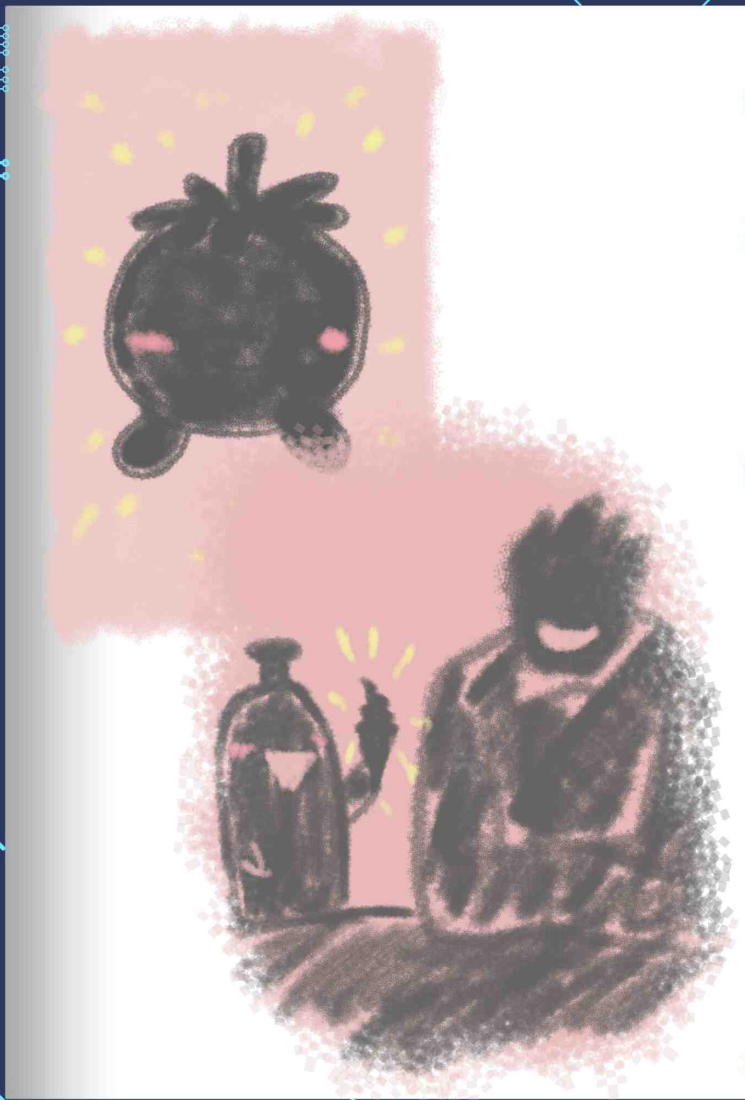


育成三つの章

『ススム～！』

『わーい！あたしこれ好き！
ススムのことも好きだよ！』

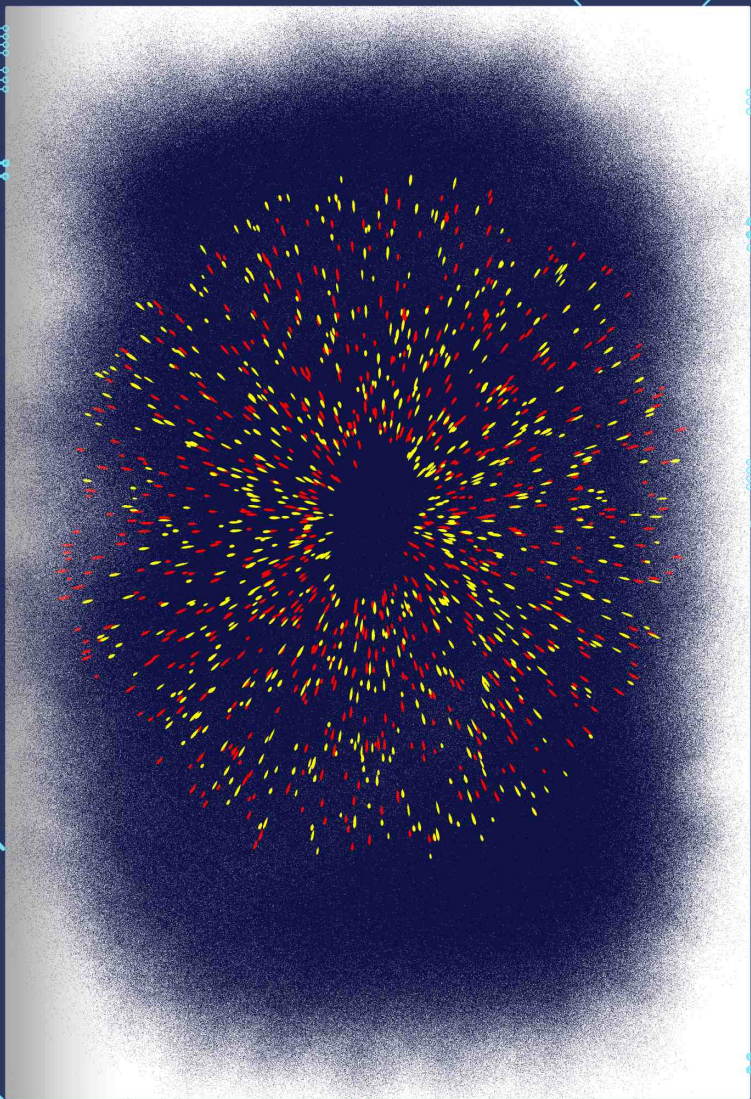
『ははは、そうかそうか～』



午前3時、鏡の前に立って
33デシベルの音量で
とある曲を聞いていると
異次元への扉が開く。

その扉からは
この世ならざるものが
飛び出してくて
人に試練を与えるのだ。

そんなウワサが
最近、巷で流れている。



この少年…

クスカミスム

楠神煤夢はこの手のウワサを
探してきては試していた。

実家は都内にある神社だ。

両親は彼が産まれて
すぐに亡くなっており、

それ以来ずっと祖父と
伯父さん達に世話になっている。



大っぴらにはしていないが
親戚の中で靈感も何もないのは
どうやら自分と祖父だけらしい。

夜な夜な変なモノを持って
どこかに行く伯父さんたちを
手伝えないのを齒がゆく思い、
何らかのパワーに目覚めないかと
無謀な望みをかけていたのだ。

身体は無駄にデカく
頑丈になったのだから
少しでもナニかできるなら
返していけるはず。

果たして、
眼前に開いた
異次元の扉からは
白いドラゴンと
タマゴが現れた。

ドラゴンのほうは
祖父に取られてしまったので
ススムはタマゴのほうを
育てることにした。

ウワサにあった
「試練を与える」
というのは
きっとコレのこと
なんだろう。

そして育て上げた暁には
自分にも…



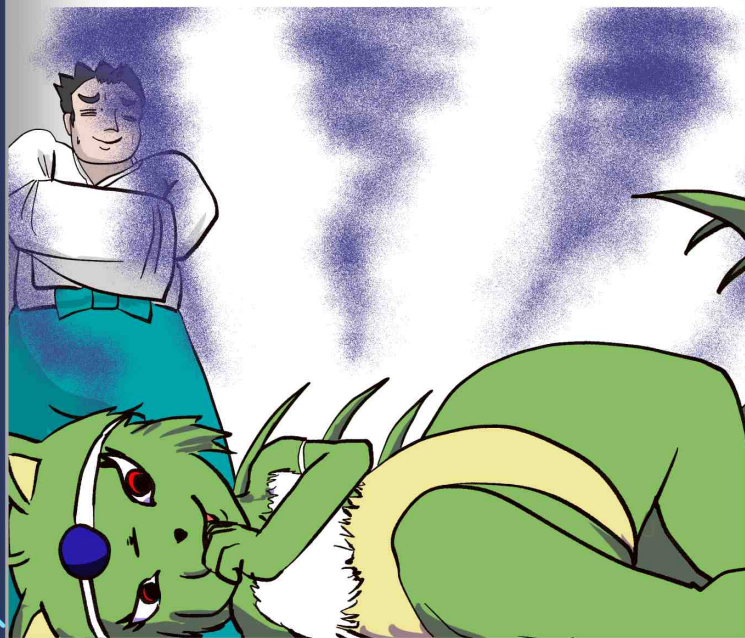
三か月後。

「ただいま～」

「……」

「あの～
おかえりくらい
言ってくれても
いいんじゃないかな？」

「あ？」



「ちょっとそこで
掃除してきた
だけじゃない。

めんどくさ。
おかえり。」

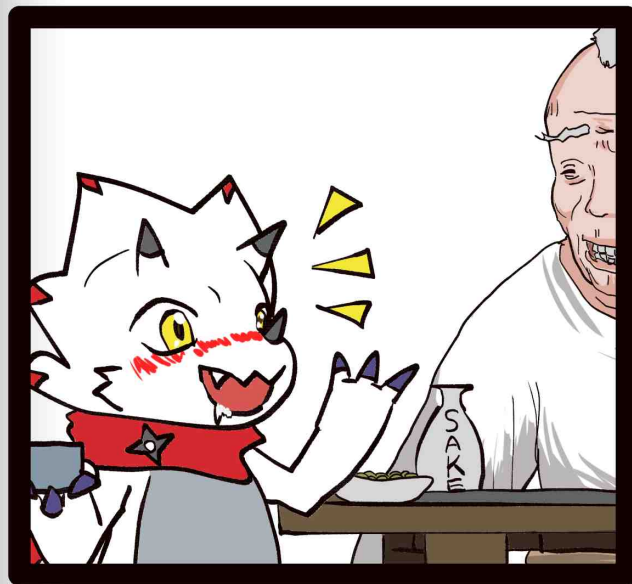
「……ううむ」



「やれやれ…
ガンちゃんはあるなに
良い子なのに…」

「あゝ ーっ
日本酒とギンナン！
チョーうめえ～」

「いや、そうでもないな…」



(だ、大丈夫なのか
これは…!?)

異界から来た
この生き物たちは
人間の言葉を理解し、
普通に会話もできてしまう。

しかし、それ故か
ウチの生活に影響されて
育ってしまったようだ。

(オレの…っていうか
この家の育て方が
悪かったのか…?)

(既にオヤジに
なった気分だぜ)

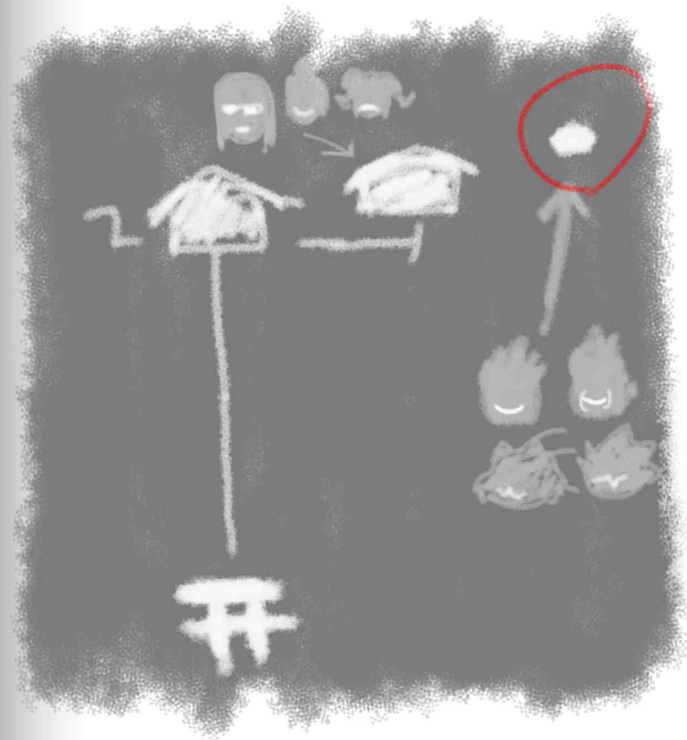
(彼女できたこともないのに)

漫然と失敗した気はしているが
ススムにはどうすれば
良かったのかわからない。

ススムと祖父センジュウの舟重は
ふだん、母家からちょっと
離れたところにある
プレハブ小屋で過ごしている。

こっちから向こうへ
行くことはあっても、
伯父さんたちが
こっちにくることはない。

そんなわけで
この惨状は100%
自分たちのせいである。



白いドラゴンのほうは
「ガンマモン」と名乗った。
ススムもセンジュウも
ガンちゃんと呼んでいる。

こちらは見事に
酒飲みオヤジくさドラゴンに
なってしまった。

ススムが育ててきた
緑色のほうの、今の名前は
「チュパモン」らしい。

彼らの慣習では
成長で姿が変わると
名前も変わるようだ。



チュパモンのほうは
できるだけマメに
世話をしてきた
つもりだが、

いまやすっかり
ナマイキな
ガキンちょだ。

従妹のカホからススムへの
アタリも相当キツイが
それに匹敵するかもしれない。
接点はないはずなのだが…

…などと、
ひとしきり考えてから
ススムは自分を戒めた。

(どうにもならない
過去を悔いるより、
これからきちんと
するべきか)

子は親の鏡とは
よく言ったものだ。

つまるところ
自分がしっかり
していないから
こんな感じに
育ったのだろう。

己を磨かねばなるまい。

そんな結論に達したところで
チュパモンが何かを
見ていることに
ようやく気が付いた。

「ん…？」



「ひひひっ
他人のスマホを
勝手に見るんじゃ
ありませんっ」

「あ」

慌てて取り戻す。
しかし時すでに遅し。
ひみつの画像フォルダの中身は
もう全部見られている
ことだろう。

「まーまー、

中学生なんて
人生で一番の

^シ^コ^リ^ざ^か^リ
陰茎黄金時代よ、

大目に見てやりなさい」

「全くフォローに
なっていないぜ
爺ちゃん！」

「はあ〜っ

ススムはさあ…
彼女欲しいっていつも
言ってる人だよな？」

「あっハイ」

「そのためになにか
やってきたわけ？」

「い、いえ…
やってないです」

最近はおマエの世話で
結構時間を使っていたんだが…
とは言わぬが華だろう。

「だよねえ
受け身だよな」

「そ、そうデスね」

「なんか保存してあるのも
女の子が攻めなの
多いし」

「うぐっ…
いやそれは関係ない…
関係あるのか…！？」

「やっぱり自分から
相手探しに行った
ほうがいいと思うのよね
アタシ的には」

「まあ、それはそうだな…」

「今はマッチングアプリとか
あるんじゃないのかい」

「あーアレな
年齢制限とか
あるんだよ
爺ちゃん」

「ほー
そうなんか…」

「学校の子はまったく
脈なしなんですよ？」

「今からでも
探しに行かない？」

「…今日はやけに
攻めてくるな？」

「アタシ、ちょっと遠くにも
出かけてみたいのよね～。

渋谷とか？」

「それが狙いか～…」

言われるまま
乗せられるのは癪だが、
やることはやったし
この後に何かしようと思
っていたわけでもない。

それに今のままではまずいと
さっき結論付けたところだ。

さっさと始めの一步を
踏み出すチャンスかも
しれない。

「ま、行ってみっか！

オレひとりより
可能性ある
気がするしな！」

「へっへー…
そ一來なくちゃ！」

